

## 1 学校教育目標

○進んで学ぶ人 ○礼儀正しい人 ○やりとげる人

## 2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	○生徒一人一人の資質と能力を伸ばす学校 ○教師が常に指導力の向上を目指す学校 ○生徒・保護者・地域から信頼される学校
○児童・生徒像	○自ら学ぼうとする意欲があり、自尊感情と自己肯定感の高い生徒 ○礼儀正しく、他者には優しく自分には厳しい生徒 ○努力と挑戦を重ね、粘り強く学ぶ生徒 ○自ら考え判断し行動できる生徒
○教師像	○教育公務員として使命を自覚し、その職責を果たすことのできる教師 ○常に自己の指導力の向上と生徒理解に努め、研鑽に励む教師 ○教育への情熱と生徒への深い愛情があり、豊かな人間性を身に付けた教師

## 3 学校の現状及び前年度の成果と課題

### 【学校の現状及び成果】

- ① 教職員の指導のもと、全校的に落ち着いた環境の中で授業を中心に学校教育活動が展開されている。
- ② 各学校行事（運動会、文化祭、合唱コンクール）の行事が復興し始めた中、生徒たちは達成感や連帯感をもて、保護者や地域からの学校生活アンケートでは「行事への対応の内容は適切であったか」の肯定的評価94%と高い評価を得ている。
- ③ 授業においては足立SD授業実践が定着してきている。課題からめあてを引き出す授業も実践できつつある。生徒アンケートより「めあて」の提示が学校全体で97%であった。

### 【課題】

- ① 学力の定着や学習意欲の向上を図るため、学力調査等の結果・分析に基づき、教師の授業改善や授業外における学習の取組の充実を図る必要がある。
- ② 知識・技能の着実な習得を図るとともに、単元全体をとおして、思考力・判断力・表現力、問題解決能力の育成を図るため、主体的・対話的で深い学びの視点から、生徒が主体となる足立スタンダードに基づく授業改善による、発問の精度を向上させる一層の取り組みが必要である。
- ③ 不登校生徒と登校しぶり生徒の割合は高い状況にあり、生活指導部と教育相談部、教育相談コーディネーターを中心に学校全体で組織的に取り組むとともに、SCの活用SSWを活用した関係機関等との一層の連携を図る。生徒の問題行動への初期対応、保護者への対応、いじめの未然防止、早期発見、早期解決に向けて、学校全体で組織的な対応を継続する。

## 4 重点的な取組事項

	内 容	実施期間（年度） R:令和				
		R3	R4	R5	R6	R7

1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	○
2	教師の授業力の向上と小中連携の充実	○	○	○	○	○
3	心の教育の充実と組織的な対応	○	○	○	○	○

## 5 令和5年度の重点目標

重点的な取組事項－1		学力向上アクションプラン							
A 今年度の成果目標		達成基準 (目標通過率)		実施結果 (通過率結果)		コメント・課題		達成度 ◎○△●	
学びの意欲と学力の向上		到達度確認テスト 正答率学校全体 62% 令和5年度通過率 65%		今後実施		実施後記入			
B 目標実現に向けた取組み									
新・継	アクションプラン	対象学年 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認 方法	達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
1 継続	朝学習の実施	全生徒 国語 数学 英語 理科 社会	週5回 通年で 実施	【指導体制】担任 【取組のねらい・目的】 学習習慣を身に付け基礎 学力定着と学力の向上を 図る。 【使用教材】AIドリル、 教科担任作成ドリル キュビナシートの活用に よる自己分析	2月に学力到 達度テスト実 施	到達度テスト 平均正答率 62%以上	AIドリルの実施は各 学年で実施内容を決 めながら取り組んで いる。 コンテスト実施前な どプリント学習	各学年とも計画的に 朝学習を進めること ができた。 しかしAIドリルに関 しては強化月間で平 均回答数 250 問、通 常は平均 150 問程度 となった。 各コンテストの学習 を取り入れたこと にもよるところであ る。	○

継続	学習 コンテスト	全生徒 国語 数学 英語 社会 理科	各教科 年1回 ～2回 実施	<p>【指導体制】担任</p> <p>【取組のねらい・目的】各、基礎学力の向上と定着を図る。学習意欲の向上と学習習慣の形成を図る。</p> <p>【使用教材】 教科担任作成問題 各教科1回プレテスト実施後、本番コンテストを実施する。</p>	<p>定期テストによる検証。</p> <p>再テストによる検証。</p> <p>コンテスト結果で検証する</p> <p>年度末到達度テストで検証する。</p>	<p>国語・数学コンテスト全体平均90%以上</p> <p>英語コンテスト全体平均85%以上</p> <p>再テストの合格達成率80%以上。</p>	<p>1年生：英語スピーキングコンテスト実施 数学コンテスト実施 50問25分 合格者の割合50%</p> <p>2年生：国語漢字コンテスト 社会科コンテスト実施 理科コンテスト実施</p> <p>3年：理科コンテスト実施 英語センテンスコンテスト年内実施予定</p>	<p>各学年とも各教科コンテストを定期的に実施した。</p> <p>1年数学計算コンテスト年間3回実施合格者80%</p> <p>各教科4教科実施した。</p> <p>再テストを実施達成率80%を超えることができた。</p> <p>取組としては良いが結果として次年度に生かせる同課が課題</p>	○
継続	補充教室 の実施	全学年 国語・数 学・英語	毎週2 回 授業終 了後	<p>【指導体制】担任+副担任</p> <p>【取組のねらい・目的】 全体及び指名形式で、演習を中心に、つまずきの解消を図る。</p> <p>【使用教材】 教科担任作成プリント AIドリル等 キュービナシートの活用による自己分析</p>	2月に学力到達度テスト実施	到達度テスト 平均正答率 62%以上	<p>月案実施予定数は実施している。AIドリル活用</p> <p>夏休み中のAIドリル活用が1%程度であるのが課題。</p>	<p>月予定週2回実施ができています。学年全体での実施のため、行事前など実施出来たときもあった。</p> <p>達成目標との関連がどのくらいあるか検証する。</p>	△
継続	数学特訓 教室の実 施	1年生生 徒 区学力調 査数学正 答率 60%以 下の生徒 数学	夏季休 業中 7回程 度	<p>【指導体制】全教員</p> <p>【取組のねらい・目的】 学習のつまずき箇所を確認し、小学校の算数の定着を図り、中学校の正負の数の四則計算の定着を図る。</p> <p>【使用教材】 区教委勉強合宿使用教材 東京ベーシックドリル 作成プリント等</p>	数学特訓教室 終了後にテス トを実施	数学特訓教室 実施前より、 平均20%U P	数学特訓実施後テ スト	1年生の数学特訓は学年全教員による対応ができた。	○

継続	サマースクールの実施	全希望生徒 指名生徒 国語 数学 英語 理科 社会	夏季休業中 7回程度	【指導体制】 全教員＋学習ボランティア 【取組のねらい・目的】 当該年度の前半期の内容について学習のつまずきを図る。 【使用教材】市販ドリル、教科担任作成ドリル A Iドリル 東京ベーシックドリル等	2月に学力到達度テスト実施	到達度テスト 平均正答率 62%以上	7日間実施。 1年生数学特訓7日間実施した。	サマースクールは取組が定着し各教科で7日間実施できた。 取組としては良いが結果に結びついていないか検討する必要がある。	○
継続	各種検定の実施	全希望生徒 国語・数学・英語	各検定年3回 英語検定 数学検定 漢字検定	【指導体制】各教科担任 【取組のねらい・目的】生徒一人ひとりのそれぞれの目標に向かって、努力させることにより、学習意欲を高め、学力の向上に努める。 【使用教材】検定対策本	6月、7月、8月、10月、1月、2月の実施時期に確認	各種検定を各教科年3回実施	英検・漢検・数検 定期開催中	各教科の検定は生徒に提供できた。 特に英語・国語は受検者が倍増した。 英検合格者増加 ESAT-J 区平均を超えた。	△
継続	質問教室の実施	全希望生徒 全教科	定期考査実施一週間前 放課後	【指導体制】各教科担任 【取組のねらい・目的】生徒一人ひとりのつまずいている内容の解消を図り、学力の向上に努める。	6月、9月、11月、2月の実施時期に確認	質問教室を年間放課後のべ20日実施	質問教室定期テスト週間前実施中 6.9月は実施した。 英数は25%程度参加 国社理は5.6人程度	延べ20日実施した。	○
継続	学力向上委員会の設置	管理職 学習進路指導部 3名	年3回程度実施	【構成】管理職＋進路学習部 各学年1名 【取組みのねらい・目的】定期的に、アクションプランの実施状況について確認を行うとともに、内容・方法の改善を図る	実施回数	年3回程度実施	授業改善推進校として推進委員会を2回開催。 委員長とは随時開催	授業改善推進主任を任命し年間4回の授業観察週間を設定できた。	◎

継続	家庭学習ノートとタブレット端末を活用したの取組	全学年 3年生は 夏季休業 期間前ま で実施	通年	【指導体制】各担任（副担任）【取組のねらい・目的】毎日、学習用ノートやタブレット端末を活用し家庭学習に主体的に取り組む習慣を形成する。	定着している生徒の割合	毎日ノートを提出する生徒の割合が30%以上 A Iドリルやクラスルームへの課題提供の実践	家庭学習ノートの提出率月平均30%（パーフェクト賞者あり） グーグルでの課題提出率には未確認 ドリル活用月間を実施予定	家庭学習ノートの提出率は30%程度である。 タブレット端末を通しての課題提供は教員個人の取組となつてしまった。	△
継続	I C Tを活用した授業展開	全学年・ 全教科	年2回 程度実施	【構成】 学習進路部で運営 【取組のねらい・目的】 年2回、タブレット等I C Tを活用した授業について研修会を行う。	実施回数	年2回程度実施	研修会はまだ実施できていない	学習進路指導部で実践した授業観察週間を活用し意識向上が見られた。	○
新規	学習カウンセリング	全教科	質問教室と並行開催	【ねらい・目的】 個別学習カウンセリング（全教員） ・学習方法と学習習慣の形成 ・キャリア教育の視点での学習方法 ・二者、三者面談と進路指導による教育相談	全校生徒2回 悩み・進路相談 学習相談 面談回数	生徒アンケート肯定的回答80%以上	3者面談で実施 2者面談期間設定までは行っていない。 随時個人的に実施者あり	個別学習カウンセリングは学校全体として実施することができなかった。生徒アンケート学校全体として肯定的回答79%であった。	△

<b>重点的な取組事項－2</b>		教師の指導力・授業力の向上と小中連携の充実			
<b>A</b>	<b>今年度の成果目標</b>	<b>達成基準</b>	<b>実施結果</b>	<b>コメント・課題</b>	<b>達成度</b>
	教師一人一人の指導力向上	教師一人一人の指導力向上について下記の3項目を達成する	リーディングDX事業や授業改善校としての取組を通して3項目がおおむね達成できた。	区や国の施策を活用し授業に目を向けさせることができた。継続していくことが課題	◎
<b>B</b>	<b>目標実現に向けた取組み</b>				
	<b>項目</b>	<b>達成基準</b>	<b>具体的な方策</b>	<b>実施結果</b>	<b>コメント・課題</b>

授業力の向上	授業展開の確立 統一された学びのスタイルの徹底 管理職による授業評価 4段階 B以上 90%以上 生徒の授業満足度 90% 保護者授業参観アンケート「改善を要する」 5%以下 学校評価項目 90%	○足立SD授業の確実な実施と振り返りの徹底 ○学校及び学年共通指導 ○個別最適な学びの工夫 ○自己申告書授業参観、面接を重視 ○教科指導専門員の指導助言 ・授業分析（通年） ・板書撮影と発問記録による授業分析	○小中連携を通して足立SDの実践の中で焦点を当て進めることができた。 ○授業改善推進校の取組で個別な学びへの意識向上が見られた。授業満足群が90%となった。 ○自己申告の授業観察と観察週間において授業観察が実施できた授業評価90%までは届かなかった。 ○教科指導専門委員の指導が身に付く指導が進められた。	学力の定着や向上には授業力の向上が欠かせない。 そのための手立てとして授業観察のみならず区の施策を活用することが有効であるので実践した。	◎
授業展開の工夫	ICT器機を活用した授業展開の実践 生徒アンケートICT活用に関する評価70%以上	○授業内でのタブレット端末による学習内容の共有 ○タブレット端末と大型ディスプレイの活用 ○Google クラウドの活用	○授業内でのタブレット端末を使用している機会が生徒アンケートからも向上したことが分かった。 ○生徒アンケート結果授業での活用が95%との結果となった。	授業展開としてICT危機を活用するのが定着しているだけでなく、工夫する教員が増えた。	◎
資質・能力の向上	都OJTガイドラインで求められている経験年数、職層に応じた目標の達成 基礎形成期の目標達成 職層に応じた職務の遂行 共通理解と共通行動	○主幹、主任主催研修の定期実施と転入・新規採用教員研修の実施 ○OJT自己評価の実施 ○区中研への全教員参加 ○都研修センター主催研修への参加 ○教師道場公開授業参観と校内還元公開授業の実施	○各主幹が自らOJTを意識した研修計画を立て実践に移すことができた。 ○都教委作成の教員としての資質向上の指標を活用した。 ○区中研への参加意欲が高まっただけでなく、公開授業への参加教員が増えた。	一年間の取組を通して授業改善への意識が向上し改善してきている。 今後も継続して意識だけでなく実践を行っていく教員を育成していく。	○

<b>重点的な取組事項－3</b>		心の教育の充実と組織的な対応			
A	今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度

生徒一人一人を大切に作る心の教育	学校評価による数値の向上				
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
○心の教育の充実 ○いじめ防止 ○道徳授業の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>・WEBQU調査 学年「学級生活満足群」全国平均+10ポイント</li> <li>・学校評価による心の育成についてB評価以上 90%</li> <li>・自己肯定感の調査で、肯定的評価の生徒 90%</li> <li>・いじめ防止活動アンケート集計肯定的評価 90%</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○WEBQU調査年2回 QU研修の実施</li> <li>○生徒会と保護者地域関係者との連携活動の実施</li> <li>○生徒会自治活動の充実と「いじめ根絶」活動の実施</li> <li>○外部指導者を招き特別授業を実施</li> <li>○道徳公開授業の実施と地域関係者との協議会の実施</li> </ul>	<p>WebQU の研修を外部講師を招き小中連携の中で行い、小学校からの実践を進めることができた。満足群は53.5%であり全国平均より12ポイントほど上回った。</p> <p>いじめの無い生活については85%が肯定的回答であった。生徒会からのブルーリボン運動など意欲的な取組が見られた。</p>	<p>WEBQU調査年2回実施したが検査結果から要支援群の生徒への対応の必要があった。年3回のいじめアンケート調査の結果より面談を実施し、いじめへの初期対応を実施した。生活指導部会による共有を図り早期発見、早期解決に進めた。</p>	○
○不登校生徒・登校しづり生徒への対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校評価「子供は第十四中の生活に満足している」項目B以上 90%</li> <li>・不登校生徒の登校支援をすすめる継続的な関係づくりと定期面接の実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○特別支援委員会とケース会議の計画的実施</li> <li>○SSW、SCの有効活用</li> <li>○学校での居場所づくり</li> <li>○保護者、地域関係者との連携</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学校評価において肯定的回答が85%であった。</li> <li>○SSW、SCとの連携は効果的に行われた。会議を教育相談コーディネーター中心に実践できた。</li> <li>○サポートルームを効果的に活用できた。</li> </ul>	<p>達成規準 90%を超えることはできなかったことは課題である。今後も全体的な支援を随時行っていく。サポートルームについても今後も活用する。</p>	○
○全校体制での生徒への個別支援	<p>教育相談部会の年間35回以上実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○毎週木曜2校時に教育相談部会を実施</li> <li>○SC・SSWと不登校、不適応生徒の情報の共有化を図る。</li> <li>○特別支援教室との個別支援の連携充実を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○年間を通して教育相談部会を毎週開催できた。</li> <li>○教育相談部会やC4thを活用し情報共有することが適宜行えた。</li> <li>○特別支援教室との連携も随時行えた。</li> </ul>	<p>年間35回以上の部会を開催することは全校体制を築いていくうえで効果的であった。</p>	○

--	--	--	--	--	--

## 6 まとめ

### (1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

- ①全校的に落ち着いた環境の中で授業を中心に学校教育活動が展開されている。授業改善推進校として授業改革に努める教員の姿勢がある。第十四中学校として次年度も授業スタイルを改革していくことを継続していく。
- ②関係小学校との連携を教科という視点で捉え推進していくことができた。今後も担当教員を中心としたさらなる連携を図り児童生徒のためとなる授業展開スタイルの統一性を構築していく。
- ③授業においては授業改善推進校としての取組を通して生徒主体となる授業実践が定着してきている。各教科の良さを生かし学習課題からめあてを引き出す授業を目指していく。

### (2) 保護者や地域へのメッセージ

保護者の皆様には授業や行事を公開することができるようになり、落ち着いた生活をお見せすることができたと考えています。ただし課題があることは当然解決に向け学校として取り組んでいきたいとも思います。来年度は更に生徒の自治意識を高め生徒の自己肯定感の向上を目指していき。第十四中学校の教育を充実させていきます。

### (3) その他（学校教育活動全般について）

- ①学力の向上の基礎となる学習意欲の向上を図るため、生徒授業アンケートや学力調査等の結果・分析と教師の授業改善の意欲推進や授業外における学習の取組の充実を図る必要がある。
- ②個別最適な学びの視点から、知識・技能の着実な習得を図るとともに単元全体をとおして、思考力・判断力・表現力、問題解決能力の育成を図るため、生徒が主体となる授業展開とさらなる改革による、発問の精度を向上させる一層の取り組みが必要である。